

高給魅せられ医師転職



中村 哲

17



ペシャワール会は現地で、医療、飲料水確保、灌漑用水路建設、試験農場と、多岐にわたる活動となった。日本人ワーカーが常時二十人、現地職員二百六十人、臨時雇用者や作業員を含めると約千人、大所帯である。当然多忙になり、悩みも増えた。

悩みに悩まされつつも、小は資機材の値段交渉から、大は政府との交渉、その他日本人の安全性の配慮、そしてNGOの急増による職員の逃亡などである。「アフガニスタン復興」が話題になった二〇〇二年春、主にカブールに続々と大小のNGOがつかめかけ、現地では破格の高給で人々が雇われ、プロジェクトがなされた。標準的な給与のPMS(ペシャワール会医療

サービス)から職員たちが続々と辞職していった。悪気があるとは思えないが、外国団体は物価や庶民の暮らしをよく知らないのだ。パキスタン、アフガニスタンともに、給与水準は日本の約二十分の一、門衛の初任給が三千五百円(約七千円)である。せいたくをしなければ、七千円で一家が養えるの

力ネか安全か

である。帰国する際、成田から羽田までのバス賃が三千元だから、戸惑ってしまう。ともかく、これでは人材確保ができないと、基地病院の事務長に他団体の実情を調べてもらったところ、苦笑して帰ってきた(ちなみに、給与格差は日本より大きく、事務長や医師の給与は門衛の約十倍、高給取りと言ってしまう)。だがこの事務長いわく、「国連やNGOの運転手の給与の方が、自分よりはるかに高く、かつ仕事量はずいぶん少なかった」。わが病院の古参の職員は動揺が少なかつたが、比較的新しい職員たちが高給を求めて、大量に辞職していった。

そので、募集に次ぐ募集、訓練でまたおかわらわ。ところが訓練されて新技術を覚えると、すぐに逃げられる。中には外国に留学させたら、そのまますめる者もいた。PMS病院は四つの無医地区診療所を抱えているので、交代要員を確保するのが大変である。一月交代の診療所勤務も行き詰まってしまう。これは医師層に多く、問題は日本に似ている。一般に医師の生活水準が高いこと、どうしても田舎の診療所勤務を嫌がって、都市に集まりたがることである。「へき地手当」などで対処してもうまくいかない。



ペシャワール会医療サービスの診療所。交代勤務となる医師の確保が悩みとなっている＝アフガニスタン

人間にはどうしようもない性質があつて、医師の場合、高給が当然と考える上、「進歩に取り残される」という強迫的な観念がある。確かに医療技術は日進月歩、「田舎でくすぶっている」は、つぶしが利かない」という考えが強いのである。自分も一応医師であるから、分かれぬでもないが、何だかやきれぬ思いに与を受け取る。反対に、専門

技術者や医師などは「薄給」を嘆き、不満を述べるものが多いので、会計担当は不愉快な思いをするそうである。私が「教育」について懐疑的なものもこの点で、近代教育と人間の素朴さは反比例すると考えている。思い返せば、戦後日本の風潮が世知辛く、おうようでなくなつたのは「教育熱」も一役買つていた気がする。豊かさを求めるのは人情だが、力ネが欲しくなる上に、汗水流す農作業や労働など、いわゆる下積みの仕事

生活水準高く田舎の診療所勤務嫌がる

事を厭い、「進歩」と新しい変化に追いつかねばならぬという錯覚にとらわれているように見える。 結末は今の日本を考えると、徒らにしがめられ、流行から流行を漂い、大地に着いた考えはなく、人の命さえ現実感を持つことが薄くなっている。メディアを介する「情報」に振り回され、何やら私には住みにくい世界になってしまった。 言わせてもらえば、戦後教育は経済的豊かさを求めるあまり、自然から遠ざかり、日本人らしい精神が荒廃し、最近など、海外に派兵してまで国益を守るなどという者もいる。私は人殺しをしてまでおびえて食つてゆこうとは思わない。安全と力ネ社会は両立しない。そんな教育も経済も狂つているのだ。何も変化や進歩が悪いわけではないが、このごろの現地の苦労から、つい日本社会を斜めから見してしまう。 (医師・ペシャワール会現地代表)

「ペシャワール会から沖縄へ」は毎月第4日曜日に掲載します。